

・ 特許協力条約

発信人 日本国特許庁（国際調査機関）

出願人代理人	
大野 彰夫	様
あて名	
〒 140-8710	
東京都品川区広町 1-2-58 三共株式会社内	

PCT
国際調査機関の見解書
(法施行規則第40条の2)
[PCT規則43の2.1]

発送日
(日.月.年) 05.04.2005

出願人又は代理人 の書類記号 SANKYOF P0505	今後の手続きについては、下記2を参照すること。
国際出願番号 PCT/J P 2005/002886	国際出願日 (日.月.年) 23.02.2005
	優先日 (日.月.年) 25.02.2004
国際特許分類 (IPC) Int. Cl. C07D211/22, 265/30, 495/10, 413/06, C07M7/00	
出願人 (氏名又は名称) 三共株式会社	

1. この見解書は次の内容を含む。

- ☒ 第I欄 見解の基礎
- ☐ 第II欄 優先権
- ☐ 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成
- ☐ 第IV欄 発明の単一性の欠如
- ☒ 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明
- ☐ 第VI欄 ある種の引用文献
- ☐ 第VII欄 国際出願の不備
- ☐ 第VIII欄 国際出願に対する意見

2. 今後の手続き

国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規則66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。

この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。

さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。

3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。

見解書を作成した日 15.03.2005			
名称及びあて先 日本国特許庁 (ISA/J P) 郵便番号 100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号	特許庁審査官 (権限のある職員) 安藤 倫世	4 P	9837
電話番号 03-3581-1101 内線 3490			

様式PCT/ISA/237 (表紙) (2004年1月)

第 I 欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

- ☐ この見解書は、_____ 語による翻訳文を基礎として作成した。
それは国際調査のために提出された PCT 規則 12.3 及び 23.1(b) にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なヌクレオチド又はアミノ酸配列に関して、以下に基づき見解書を作成した。

- a. タイプ ☐ 配列表
☐ 配列表に関連するテーブル
- b. フォーマット ☐ 書面
☐ コンピュータ読み取り可能な形式
- c. 提出時期 ☐ 出願時の国際出願に含まれる
☐ この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された
☐ 出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3. ☐ さらに、配列表又は配列表に関連するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 補足意見:

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲	1-48	有 無
	請求の範囲		
進歩性 (IS)	請求の範囲		有 無
	請求の範囲	1-48	
産業上の利用可能性 (IA)	請求の範囲	1-48	有 無
	請求の範囲		

2. 文献及び説明

文献1: JP 2002-533462 A (SANOFI-SYNTHELABO) 2002.10.08

文献2: JP 06-211850 A (ELF-SANOFI) 1994.08.02

文献3: JP 2002-138088 A (SANOFI) 2002.05.14

文献4: JP 2000-103791 A (三共株式会社) 2000.04.11

[1] 請求の範囲1-23に記載された発明は、国際調査報告で引用された上記文献1-4により進歩性を有しない。

文献1及び2には、請求の範囲1の一般式(I)において、 R^3 がフェニル基である化合物が記載されており(文献1第30頁下3行、文献2第34欄第10-12行参照)、請求の範囲1に係る化合物は、これとは、 R^3 のフェニル基が、ハロゲン原子又はニトロ基で置換されている点で相違する。

しかしながら、脱離基としてのスルホニルオキシ基は、ハロゲンやニトロで置換されていても同等であることが技術常識であるから(文献3第15頁、文献4第11頁参照)、文献1及び2に記載の脱離基であるベンゼンスルホニルオキシ基を、ハロゲン化またはニトロ化ベンゼンスルホニルオキシ基に代えてみることは、当業者が容易に行い得ることである。

更に、請求の範囲1の一般式(I)における、 R^1 、 R^2 に相当する各基についても、文献1及び2に記載されている。

[2] 請求の範囲24-36に記載された発明は、国際調査報告で引用された上記文献1-4により進歩性を有しない。

文献1及び2には、請求の範囲24-36に記載された一般式(I') (II')の化合物の光学純度等については明示されていないが、ラセミ体を結晶化により光学分割する方法は周知慣用の方法であるから(必要であれば文献3第29頁、文献4第34頁参照)、文献1及び2に記載の化合物について、必要に応じ結晶化による光学分割を行うことは、当業者が容易に行い得ることである。

補充欄

いずれかの欄の大きさが足りない場合

第 V 欄の続き

〔3〕請求の範囲 37-48 に記載された発明は、国際調査報告で引用された上記文献 1-4 により進歩性を有しない。

文献 3 及び 4 には、請求の範囲 37 に記載された一般式 (I I I) の製造方法が記載されており、請求の範囲 37 に係る製造方法は、これとは、 R^3 の脱離基がフェニル基である点で相違する。

しかしながら、文献 1 及び 2 には好ましい脱離基としてベンゼンスルホニルオキシ基が記載されているし (文献 1 第 30 頁下 3 行、文献 2 第 34 欄第 10-12 行参照)、文献 3 及び 4 には、当該基は求核残基として脱離する基であれば特に限定はない旨記載されており (文献 3 第 15 頁、文献 4 第 11 頁参照)、 R^3 に相当する基をフェニル基となし得ることも記載されている。